

中学校 5

平成 10 年 度

教育研究員研究報告書

音 楽

東京都教育委員会

平成10年度

教育研究員名簿（音楽）

区市町村名	学 校 名	氏 名
港 区	港区立朝日中学校	風見幸子
目黒区	目黒区立第五中学校	○ 境 みどり
豊島区	豊島区立真和中学校	○ 櫻井寿子
練馬区	練馬区立光が丘第三中学校	安部 努
葛飾区	葛飾区立東金町中学校	□ 森 一夫
日野市	日野市立大坂上中学校	刀 禰 孝 司
東村山市	東村山市立東村山第三中学校	◎ 小中原 浩 子
清瀬市	清瀬市立清瀬中学校	□ 藤 麻 匡 世

◎世話人 ○副世話人 □記録
担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 原 田 徹

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の構想図	3
III	研究の内容	
1	調査研究	4
2	理論研究	
(1)	コミュニケーションを図るために	6
(2)	読譜指導	8
3	授業研究	
	【指導事例Ⅰ】「ミュージカル『美女と野獣』」	10
	【指導事例Ⅱ】「言葉を使って音楽づくりをしよう」	14
	【指導事例Ⅲ】「ミニ・ミュージカルにチャレンジ」(エーデルワイス)	18
	【指導事例Ⅳ】「日本の音に親しむ」	22
IV	研究の成果と今後の課題	24

研究のあらまし

研究主題を「自ら学ぶ意欲を高め、共に楽しむ音楽活動の工夫」と設定し、音楽の授業に関するアンケートを実施した。その結果、①コミュニケーション能力が不足していること、②読譜力を身に付けたいと思っていること、③ポピュラー音楽への興味・関心が高いこと、④日本の音楽に関心が高いこと、などの実態が分かった。

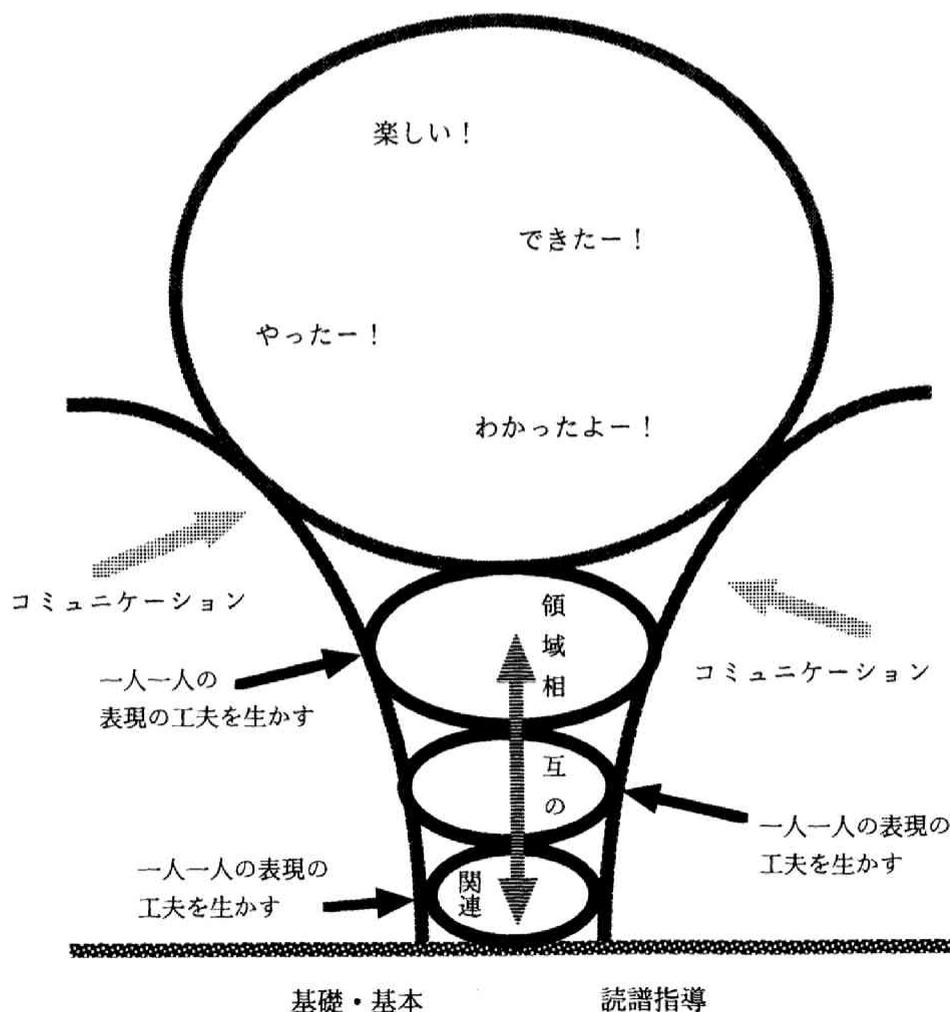
そこで仮説を立て、指導の方法として、①コミュニケーション、②自己表現、③領域の関連、④基礎・基本、の視点から仮説を検証するための授業研究を4回行った。研究が深まるにつれ、課題も見えてきたが、活動過程で多くのコミュニケーションが図られるようになり、人間関係が深まるなど生徒が楽しく生き生きと活動し、学習している様子が見られるようになった。

I 主題設定の理由

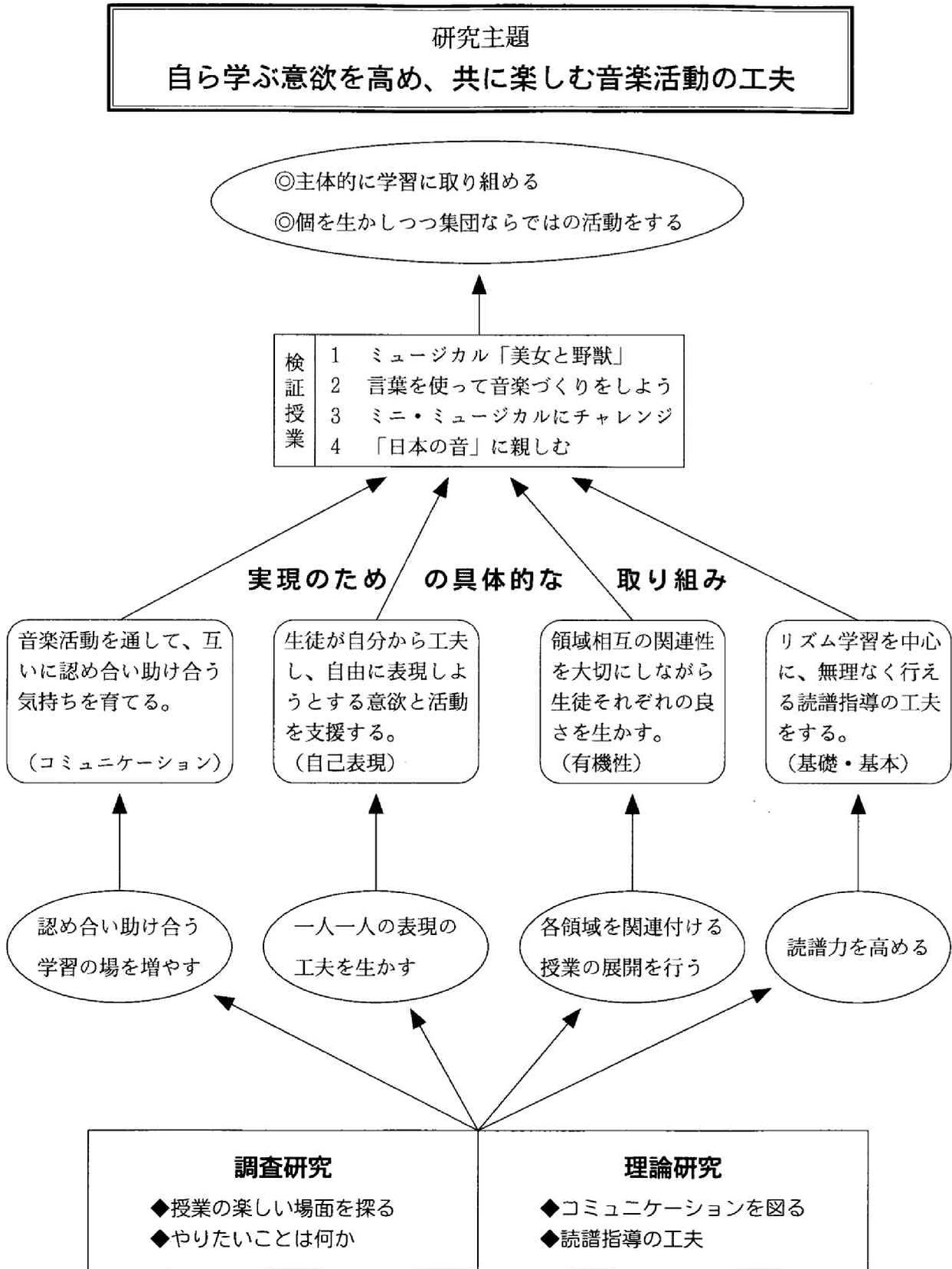
本研究員は、生徒が楽しく生き生きと活動する授業を行うため、様々な視点から指導の工夫をすることが必要であるということで共通理解した。そして、人とのかかわりを大切にするため、音楽活動を通して認め合い、助け合う学習の機会を増やし、クラスで学ぶ楽しさを味わわせたいと考えた。

そこで、研究主題を「自ら学ぶ意欲を高め、共に楽しむ音楽活動の工夫」と設定して、生徒が主体的に取り組む授業で、楽しいと実感でき、成就感がもてるように研究を進めることにした。そのために、音楽の授業に対する生徒の思いや願いを知るアンケート調査を行った。

そして「認め合い助け合う学習の場を増やし、一人一人の表現の工夫を生かすとともに、読譜力を高め、各領域を関連付ける授業の展開をすれば、自ら学ぶ意欲を高め、共に楽しむ音楽活動ができるだろう。」という仮説を立て、仮説を検証するために授業の工夫・改善に取り組んだ。



II 研究の構想図



Ⅲ 研究の内容

1 調査研究

<対象人数> 8校 756名（1年生244名 2年生256名 3年生256名）

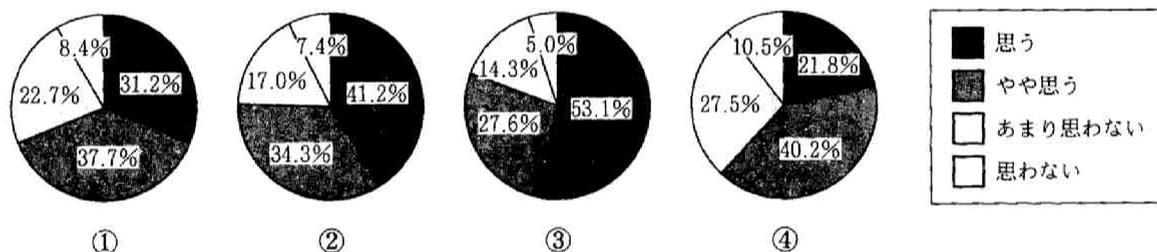
<実施時期> 平成10年7月

(1) 音楽の授業の中であなたはどんな場面の時に楽しいと思いましたか？

<自分自身として>

- ① 新しい曲や楽器に出会ったとき
- ② 練習してうまく歌が歌えるようになったとき
- ③ 練習してうまく楽器が演奏できるようになったとき
- ④ 音楽を聴いて今まで知らなかったことが分かったとき

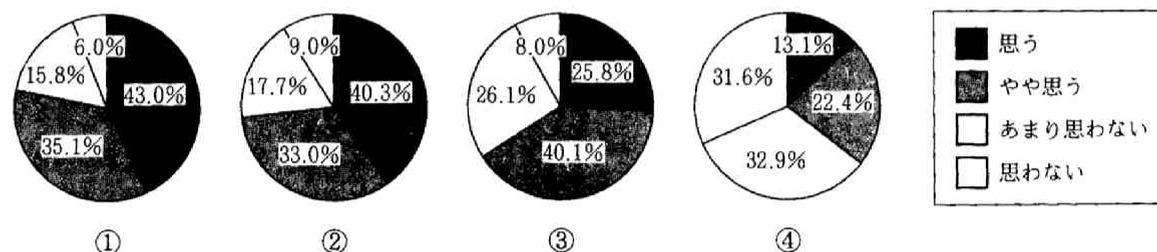
全学年 男女総合



<みんなで取り組んで>

- ① 合唱（合奏）をみんなと合わせてうまくできたと感じたとき
- ② 「うまい」「上手」と友達や先生に言われたとき
- ③ 友達同士で教え合ったり助け合ったりしたとき
- ④ みんなの前で発表（演奏）したとき

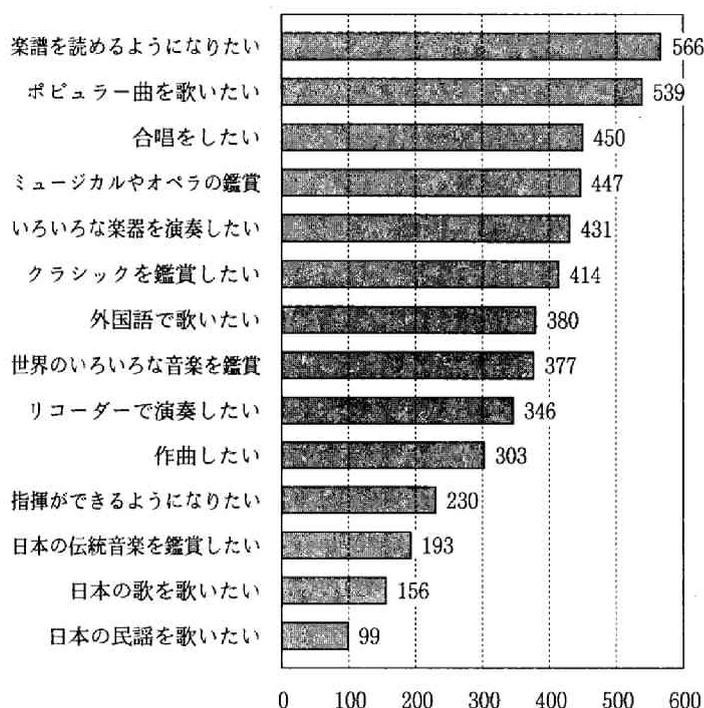
全学年 男女総合



【考察】

全体的に授業に楽しく取り組んでいる生徒が多い。また、合わせる楽しさを感じている生徒は多いが、教え合う、助け合う経験に乏しく、その方法がよく分からないようだ。みんなの前での発表は、機会を増やし自信をつけることで楽しみにつながっていくと考える。

(2) 必修教科の授業であなたはどんなことをやりたいですか。



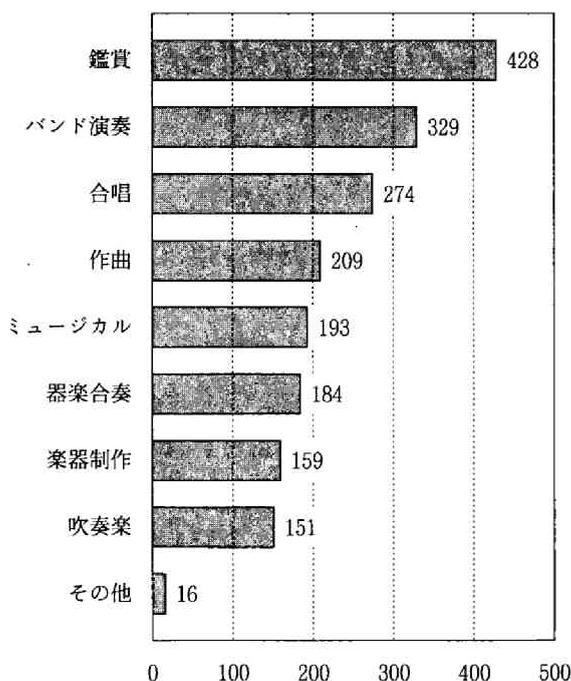
【考察】

予想した以上に「楽譜を読めるようになりたい」が多かった。読譜指導に工夫をする必要がある。

ポピュラー曲に関心が高いので、授業にうまく取り入れていきたい。鑑賞は、ミュージカルやオペラなどを好み、映像メディアを通して、総合芸術を楽しもうとしていることが分かった。

また、日本の音楽に関心が低いので、もっと身近に感じさせたい。

(3) 選択教科の授業であなたはどんなことをやりたいですか。



【考察】

上記(2)の必修教科の授業では4番以降の鑑賞が、選択教科の授業では最も多い。受け身の部分も多少あるかもしれないが、関心度が高い。バンド演奏にも興味関心が高く、必修教科のポピュラー曲への関心とつながっている。必修教科の授業では、ミュージカルやオペラの鑑賞、選択教科の授業ではミュージカルに取り組みたいと考えており、総合芸術への意欲が感じられる。

2 理論研究

(1) コミュニケーションを図るために

前述のアンケート結果によると、合唱や合奏をみんなで合わせてうまくできたときに「楽しい」と感じている生徒の多いことが分かった。しかし、一方では、人間関係が稀薄で、友達同士で教え合ったり助け合ったりする経験に乏しく、その方法も分からないという実態が浮かび上がってきた。

音楽の授業においては、クラス全員による合唱やパート練習、グループでのアンサンブルなど、一人ではなく、仲間と活動する場面が非常に多い。友達同士で、コミュニケーションを図りながら、互いに認め合い助け合っていくことができたなら、授業がより活発で楽しいものになると考え、コミュニケーションの図り方について研究を進めた。

授業を開始して、すぐに学習活動に入ると、互いにコミュニケーションがとれず、学習も思うように進まないことがある。そこで学習活動に入る前に、簡単な遊びやゲームを行い、心を解放させることが必要ではないかと考えた。その結果、構成的グループエンカウンターの方法が、集団でのコミュニケーションづくりに効果的であることに気付いた。

グループエンカウンターとは、集団を対象にして、互いに助け合い支え合う人間関係づくりを目的とした活動である。例えば「鏡になる」という手を挙げたり、首を回したりするなどのエクササイズは、教師のまねを生徒がする、またはリーダーのまねを他の生徒がするという活動である。この活動は簡単なもので、生徒から笑いがこぼれ、クラスの雰囲気も和む。この手法を歌唱の姿勢の指導に活用することもでき、工夫次第で様々な指導に応用できる。

コミュニケーションを図ることは、人間関係をつくる基礎ととらえ、エクササイズを行うことによって、教師も生徒も人間関係をつくる基礎を体験的に学習する。また、エクササイズを通して互いの個性を知ることにより、相手を思いやり、気遣う心がはぐくまれ、よりよい人間関係が生まれると考える。

以下は、構成的グループエンカウンターの方法を取り入れた実践例である。授業の導入として、その日の授業内容に即したものを、明確なねらいをもって取り入れると大変効果的である。

◎グループでの人間関係づくり（リレーション）

○運ぶ : グループで円になり、教師が指示した物を運ぶマネをするリレー。

<例> 「重い物を運んでください。」

「赤ちゃんをそっと抱いて運んでください。」等

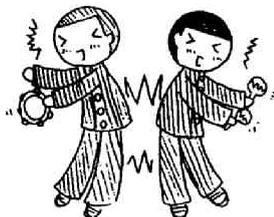


* P.18の指導事例Ⅲでは、生徒たちがこのエクササイズを楽しんで行っていた。グループで一つのを運ぶという共同体験により、チームワークができ、その後のグループのリズムリレー（手拍子）も円滑にできたように思う。

○パントマイム：問題をグループの代表者に示し、“はじめ”の合図によりパントマイムで班員に伝える。早くわかったグループの勝ち。

＜例＞「突然雨が降ってきた。困ったなあ。」等

* P.18の指導事例Ⅲでは、教師がはじめに見本を示し、その演技に教室内がとても盛り上がった。はじめは恥ずかしさからか消極的な生徒も見られたが、だんだんと気持ちがほぐれ、演技への抵抗感も薄まったように思う。受け取る側が「わかってあげよう」という姿勢をもつようにするため、教師の助言も必要である。このエクササイズにより、グループ内の仲もよくなり、その後のミニ・ミュージカルに向けての話し合いも活発に行われ、演技にも生かされたと思う。



○聖徳太子は：グループで代表者を一人決め、他の班員は用意されたそれぞれ違う単語を同時に言う。教師の合図で一斉に始める。代表者は画用紙に聞き取った単語を書く。早く聞き取ったグループの勝ち。

＜例＞モルダウ、ブルダバ、スメタナ、オーケストラ、ビシェフラト

* どの班もやる気を出して大変盛り上がった。「モルダウ」の鑑賞の授業では、前時の復習として教材に関係ある言葉を問題とし、ゲーム感覚で復習ができた。その後の鑑賞の集中力が向上したと思う。

＜リレーションを行っての生徒の感想＞

- ・思ったより楽しかった。
- ・普段あまり話をしない人とも仲良くできた。
- ・新しいグループをつくった時は不安だったけれど、リレーションをしたことでグループ活動がうまくできた。
- ・友達の意外な一面を発見した。
- ・最初は恥ずかしかったけれどだんだん体を動かしたり声を出すことが平気になった。
- ・楽しいので、またやりたい。 など、ほとんどが楽しいという感想だった。

この他にも、2人組で互いに肩や背中をたたいて身体をほぐす、手をつないだり、肩を組んで歌う、手や足を使ってリズムの模倣、リズムにのって肩たたきなど、簡単に取り入れられるものがたくさんあり、アイデアの組み合わせにより、エクササイズの方法は多数ある。

このようなリレーションづくりを行うことによって、クラスやグループの雰囲気も和み、互いに仲良くなり、認め合う関係も深まってくることを実感した。ただし、これらの活動を、単なるゲームとして行うのではなく、真剣さをもって実施すること、またあくまでも授業の導入（10分程度）として取り扱い、このリレーションによって学習活動が円滑に行われるよう意識することが大切である。

私たち教師は、様々なコミュニケーションの図り方を知り、遊びの要素を積極的に取り入れながら授業に生かしていくことが必要である。



(2) 読譜指導

① 読譜指導の意義

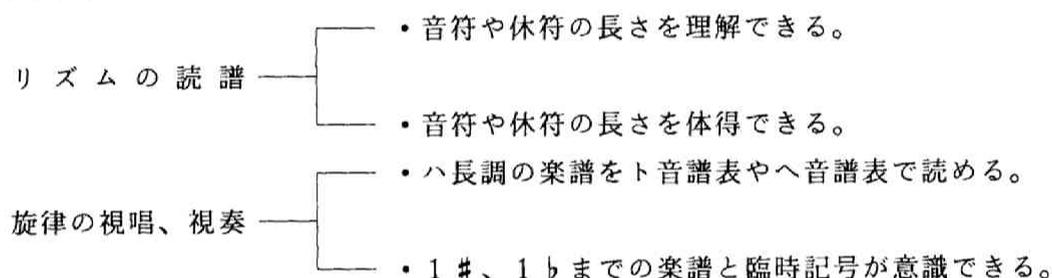
アンケートの結果、多くの生徒が楽譜を読めるようになり、自分の力で視唱や視奏ができるようになりたいと感じていることが分かった。しかし、実際の授業においては、読譜指導が十分に行われていない状況もあり、生徒自ら視唱や視奏を進んで行うことができていないのも現状である。

そこで本研究では、読譜力を音楽科の基礎・基本の一つとしてとらえ、読譜力を向上させることによって、生徒一人一人が自己表現力を高め、楽曲への取り組みが意欲的になると考え、読譜についての基礎的・基本的な内容と段階的指導について、具体的な研究を進めた。

そして読譜力が向上することによって、楽譜を通して音楽を表現でき、自ら表現の工夫をしようとする事へつながり、生涯にわたって音楽に親しむ生徒が増えると考え。

② 本研究員の考える読譜力

中学校で合唱や合奏をしたり、作曲や編曲をしたりするために必要な基礎的な読譜内容について示した。



- 例えば
- 歌唱共通教材の「夏の思い出」などを自分で歌えること。
 - 器楽では、#や♭を意識し自分の力で演奏できること。
 - 思い浮かんだ旋律がどんなリズムなのか、旋律の高低はどうなっているのかがわかること。

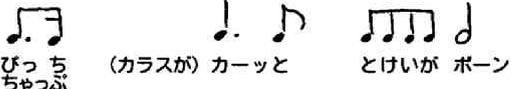
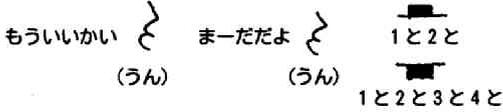
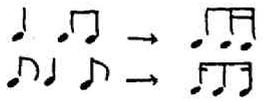
③ 指導上の留意点

- ア 楽しみながら取り組めるように工夫すること。
- イ 音楽ゲームなどの活動も取り入れながら行うこと。
- ウ #と♭がついていることが意識できること。
- エ 鑑賞と表現との関連を図りながら行うこと。
- オ 生徒一人一人の習熟度を評価しながら行うこと。
- カ 授業の中で、1回15分以内におさえること。
- キ 長期にわたって指導計画を立て、繰り返し行うこと。

④ リズムについての指導例

リズムの読譜力を向上させるためには、段階的に学習項目を理解することが大切である。そして、知識だけではなく身体で表現し体得できるように工夫してみた。

例

	学習項目	音符 休符	工夫や留意点など
第1段階	テンポ感の体得		基準となる拍を打ちながらリズム遊びを実施。四分音符と八分音符を中心に、基準の速さの中で音符を打つ。 
第2段階	言葉とリズム		四分音符 四分休符 八分音符 八分休符の組み合わせでことばをあてはめてみる。普通のことばのほとんどが表現できる。 
第3段階	発音づけ		二分音符 付点二分音符 付点四分音符を中心に第2段階の音符の長さとして（ター）となることばの違いを感じとる。 
第4段階	休符の数え方		テンポを変えずにことばの間に入り込む休符の感じをつかむ。短くなってしまいがちなので気をつける。 
第5段階	16ビートへの応用		抵抗なく八分音符から十六分音符へ。十六分休符を取り入れた応用。初めはゆっくりの速さから行い、序々に速くしていく。 
第6段階	シンコペーション		第2段階で行ったことに、タイを付けた形の音符を学習する。 

3 授業研究

【指導事例Ⅰ】 題材名 「ミュージカル『美女と野獣』」

第3学年選択教科音楽

選択音楽で、手づくりのミュージカルに取り組んだ。11月の学芸発表会を目指して、脚本、衣装、美術など、生徒が試行錯誤をしながらつくり上げた。つくり上げる楽しさと生徒の輝く姿を見ることができた。

1 題材設定の理由と研究との関連

表現活動としてのミュージカルは、歌唱、鑑賞、器楽、創作の活動に加えて、演劇的な要素も取り入れるなど、教科の枠を越えた総合的な学習である。

このことから、美術、舞踊、衣装などが必要となり、美術科、体育科、技術・家庭科などの協力を得ながら、生徒に自己の適性や個性を生かす活動の場を設定することができる。

ミュージカルを通して、自ら学ぶ意欲を高め、豊かな感動体験を共有することができると考え、この題材を設定した。

2 仮説検証の視点

	コミュニケーション	自己表現	領域の関連
指導目標	生徒が、互いに協力し合い、手づくりの舞台をつくり上げていく態度を育て、感動体験を共有させる。	舞台芸術の美しさを味わいながら表現させる。 自らの適性と個性を生かす。	舞台芸術として、美術、舞踊、演劇などの要素を、音楽の各領域と有機的に結び付け表現させる。
評価の観点	各部門での役割を自覚して、協力し合い、助け合って活動していたか。 互いの良さを認める態度が育っているか。	自らの適性や個性を理解して役割を分担し、進んで練習を行い、自分なりの表現をしようとしているか。	各要素と各領域が有機的に結び付くことで、多様な表現活動ができたか。
指導上の工夫	各部門のリーダーを中心に、組織的に準備作業を行う。 毎時間の最初には、必ず全員で「美女と野獣」のテーマ曲を歌い、全員の心を一つにする。	舞台上で演じる役割以外にも、生徒の適性や個性に配慮する。 生徒の自主性を尊重するとともに、自分の考えが表現できるように、教師が適切に支援する。	演技部門（音楽家、体育科）、美術部門（美術科、技術科）、衣装部門（家庭科）の相互の関連を図りながら準備を進めるように、各教科の教員との連携を密にする。

3 生徒の反応と考察

ミュージカルに取り組んで（発表会後の生徒のアンケートより）

- | | | | |
|---------------------|------|-----------------|------|
| ① 楽しく取り組むことができた | 100% | ② またやってみたい | 100% |
| ③ 友達と協力し、助け合うことができた | 89% | ④ 自主的・意欲的に活動できた | 74% |

(1) コミュニケーションの視点

「友達の意外なやさしさを見た。」「演技練習もみんなで話し合って協力していた。」「普段あまり話さない人とも話すきっかけがあり、友人の輪が広がった。」「自分の仕事を手伝ってもらったり、他の仕事を手伝ったりした。」「練習は大変だったが、みんなでどうすればいいかを話し合って完成したのでうれしかった。」など、歌や演技練習、道具類の作製などを通して助け合い、協力している姿が見えた。

この活動を通して、自分が必要とされているという意識とともに、互いに協力することの大切さが分かってきたのではないかと思う。その中で、多くの生徒が友達の良さを発見し、準備の過程でつくり上げることの楽しさを感じている。そして、生徒同士のかかわり合いが深まるにつれ、自主的に活動する意欲が高まってきていることが分かった。

(2) 自己表現の視点

「もっと効果的な照明の演出をしようと工夫したこと。」「みんなで振り付けを考え、動きがそろうようになったこと。」「歌や演技が上達していくことや、大道具などがだんだんできていくのも楽しかった。」「目立たぬ所で頑張っている人を見て、私も頑張ろうと思った。」など、キャストのみならずすべての生徒が、自らの個性や適性を生かそうとする場面が多く見られ、自分を表現することへの自信が深まってきたようだ。

(3) 領域の関連の視点

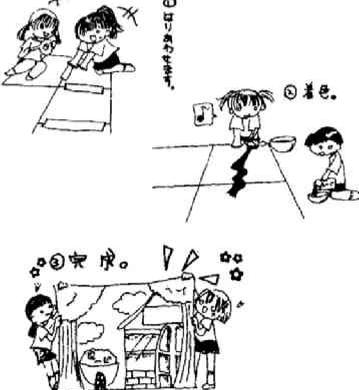
「新しい自分や可能性を見つけることができたので楽しかった。これをステップにどんどん挑戦していきたい。」「いい経験だったと思うし、舞台という空間の中で自分が歌ったり、踊ったりしているのがスゴク楽しかった。やってみてよかった。舞台が終わったとき感動した。」など、総合的な学習の効果がでたと考える。別々に進行していった多様な領域が、舞台という場でひとつになって結び付き、そこで生徒たちは感動という成就感を味わうことができた。

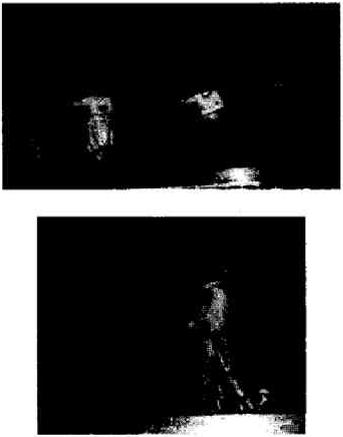
(4) まとめ

自ら学ぶ意欲を高め、音楽活動を共に楽しむために「ミュージカル」は効果的な題材であることが分かった。しかし、準備の最終段階になって授業の時間だけでは足りなくなってしまい、「もう少し時間が欲しかった。」という生徒の声が数多く聞かれた。この活動は長時間にわたるため、教師が各部門の進行状況を常に把握し、活動計画の調整をするための助言を適時に行うことが必要であると感じた。

最初はあまり意欲的でなかった生徒が、発表会を終えて「楽しく取り組めた。」「またやってみたい。」と変容してきた。このことこそが「ミュージカル」に取り組んだ大きな成果と言える。

4 学習の実際

	演技部門	美術部門	衣装部門
4 月	<p>① 演目の決定 …………… 選択教科授業の紹介で、あらかじめミュージカルに取り組むことを示しておく。</p> <p>② シナリオの完成 …… 2名の生徒が担当し、取り上げたい場面は演技部門の生徒で相談した。</p> <p>③ キャスト決め …… 歌、演技、せりふのオーディションにより決定する。</p>	<p>☆ほとんどの役に複数の生徒がエントリーして、熱気のあるオーディションとなった。</p>	
5 月	<p>④ 各部門の活動 …… 本番の舞台での役割の他に、準備段階でも生徒の適性や個性に計画作成</p>	<p>合わせ、3つの部門の一つに所属する。</p>	
6 月	<p>・歌唱とダンスの振り付けを練習する。</p> <p>♪美女と野獣1 (歌唱) ☆毎時間最初にテーマ曲を全員で歌う。</p> <p>♪朝の風景1 ☆歌唱、演技、せりふの練習をする。</p> <p>♪朝の風景2 (歌唱)</p>	<p>・演技部門と相談しながら必要な大道具や小道具について考え、部門内で分担を決めて作製する。</p> <p>☆今回は、①絵画班、②小道具班、③大道具班に分かれ、互いに協力しながら作製した。</p> <p>①絵画班 厚地の画用紙16枚をガムテープで貼り合わせ、街の風景、野獣の城、図書館の3場面を美術科教員の協力を得て作製する。</p>	<p>・キャストの衣装は、演技部門と相談しながらデザインを決める。</p> <p>☆キャスト衣装のデザイン画を描き、作る衣装を決める。</p> <p>・演ずる生徒の採寸を行い、生地の色、素材や必要量をまとめ、付属品とともに購入する。</p>
7 月	<p>♪強いぞガストン ☆歌唱と街の娘のダンスの振り付けをする。</p> <p>♪愛のめばえ (歌唱)</p>		 <p>・担当者を決めて、裁断、縫製などを行う。作業は家庭科教員の協力を得て、家庭科室で行う。</p>

	演技部門	美術部門	衣装部門
9月	<p>♪一人ぼっちの晩餐会 ☆歌唱とウェイトレスとウェイターのダンスの振り付けをする。</p> <p>♪夜襲の歌 ☆歌唱と城の住人のせりふと演技の練習をする。</p> <p>・場面を区切りながら、読み合わせと立ち稽古を行う。 ☆美術部門と衣装部門との連絡を密にする。</p> <p>・舞台練習までに、音響係との打ち合わせをする。</p> <p>・10月の第1週までに、照明プランを完成し、照明係と打ち合わせをする。 ☆照明係は、舞台上やスポットとの息が合うまで練習をする。</p>	<p>②小道具班 朝の風景（花、野菜、パン、買い物かご等）、西の塔のバラ、魔法の鏡、晩餐会（大きなナイフ、フォーク2本ずつ）、魔法の杖などを作製する。</p>  <p>③大道具班 野獣の城の牢屋やベルの家のドアを作製する。 ☆牢屋とドアについては何度も話し合い、工夫を重ねて作った。</p> 	 <p>☆ルミエール、コグスワーズ、ポット夫人、チップについては、美術部門と協力して作製した。 (ルミエール・チップは段ボールを利用した。コグスワーズの手を工夫し、ポット夫人のスカート部分に針金を入れてかなり苦労した。)</p> 
10月	<p>*10月第2～第4週の授業では、体育館にて舞台練習。各部門は準備を終えておく。</p> <p>*舞台では、演技・音響・音楽・照明に分かれ、演技部門のリーダーが全体の演出を行う。</p> <p>11月上旬に、学芸発表会にて発表する。</p>		

各ペアで、自分たちの好きな分野から共通点を探しテーマを決め、そのテーマに関連した言葉を集めて、交通標語のような調子のよい言葉の組み合わせをつくる。それをリズム符に直し、パソコンで音程を付けて簡単な曲をつくった。

1 題材設定の理由と研究との関連

創作活動は、演奏や鑑賞などの音楽的経験と深くかかわりながら行われることが大切である。そして、生徒が興味や関心を示す創作活動を行うためには、身近な言葉を使い、言葉のリズムを音符や休符に表すことから始めることが効果的であると考えた。また、楽譜をすぐに演奏でき、演奏能力に差の生じないパソコンを活用し、基礎的な読譜力を伸ばすこともねらいとした。

そこで、創作過程や作品発表会での相互評価を通して、互いの意見を交換し、良さを認め合うことにより、自分たちでつくったという成就感を味わうことができるとともに、リコーダーで演奏したり、鑑賞し合ったりすることで、自己表現力を高めることができると考え、本題材を設定した。

2 仮説検証の視点

	コミュニケーション	自己表現	領域の関連	読譜指導
指導目標	共同制作の中で、助け合いや作品の聴き合いを通して、互いに認め合っていく態度を育てる。	自分たちの作品づくりを通して自己表現をさせる。また、作曲のプロセスを学ばせる。	創作した曲を自分たちでリコーダーを使って表現させる。	言葉を使って、簡単なリズムをつくったり打ったりすることができるようにする。
評価の観点	共同制作の中で助け合っている姿が見られたか。作品の聴き合いを通して、互いの長所を見つけ、認め合う態度が育ったか。	自己表現が満足のいく形でなされているか。また、作曲のプロセスを楽しみながら学ぶことができたか。	創作した曲をリコーダーで演奏することにより理解を深めることができたか。	言葉のリズムをつくったり打ったりすることができるようになったか。楽譜に対する理解が深まったか。
指導上の工夫	必ずしも仲の良い者同士ではない二人組で制作をするが、話し合いを十分にいき、意思の疎通を図ることができるようにする。	表現メディアとしてパソコンを活用する。また、リズム伴奏を容易にすることで、楽しさを演出する。	自分でつくって自分で演奏することで、曲に対する愛着を深められるようにする。	日本語の言葉が本来もっているリズムを使って、リズム表記を身近なものとする。

3 生徒の反応と考察

(1) コミュニケーションの視点

「友達に質問されて、ドキドキした。」「友達に教えてあげて、先生になった気分がした。」「近くの人が優しくかった。」「前より仲良くなった。」「友達の新しい面が見え、今まで以上に親しくなれた気がする。」など、制作の途中に生徒同士で多くのコミュニケーションが存在していることがわかった。また、「発想がおもしろい子を発見できた。」「男子も意外にできていた。」「〇〇君の音程のセンスがすごいと思った。」など、クラスメートの新たな一面を発見できた生徒も多くいた。

この授業では、パソコンを通して、より身近な友達と協力しながらコミュニケーションを図ることができたことが大きな成果といえる。

(2) 自己表現の視点

「一人一人が違う曲で楽しかった。」「もともと音楽は好きだったけど、つくるのが面倒と思っていた。しかし実際つくって楽しかった。」「作曲をまたしたい。」というように肯定的な意見が多数あった。また、「メロディーが、たくさんあることに気付いた。」「音楽をつくる難しさがわかった。」など、音楽に対してのとらえ方に変化が見られ、表現への意識が高まってきたようだ。

(3) 領域の関連の視点

リコーダーで演奏した後の感想では、「もっと簡単なメロディーにすればよかった。」と言いながら、自分たちのつくった曲を演奏する態度は普段以上に楽しそうであり、創作に対するさらなる意欲が感じられた。

既成の楽曲に対しては、模範的な演奏などにより、その楽曲のイメージが示されているため、自分なりの表現方法ができないことがある。今回の学習を通して、自分たちのイメージを膨らませ、伸び伸びと表現している様子が見られ、鑑賞していてもそれぞれの演奏を認め合う態度が育ったようだ。

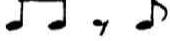
(4) 読譜能力の視点

「少し読めるようになった気がする。」「楽譜が読めてうれしかった。」などが多くあるものの、「あまり変わらない。」「読めるようになったとは思えない。」などの意見も少なくなかった。読譜力の向上は、生徒の興味・関心を失わせないで、継続的に指導することが大切である。今回の授業で、パソコンを活用しながら、教師の援助をあまり受けずに音符や休符の組合せを表すようになったことは今後期待できると感じた。

表現メディアとしてのパソコンの長所

- ① 演奏能力や読譜能力の差を僅少にすることができる。
- ② 自分で書いた（入力した）楽譜を実際の音としてすぐに確認できるので、楽譜を感覚的に見ていく能力の向上が図れる。
- ③ フィードバックが速いため、失敗しても短時間に何度でもやり直しができる。
- ④ 制作過程や発表会で、生徒同士の聴き合いが容易である。

4 学習の実際

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点 など
<p>1 テーマ決めと言葉探し</p> <ul style="list-style-type: none"> 各ペアで相談をして自分たちの共通点を探し、テーマを決める。 さらに、そのテーマに関連した言葉を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> サッカー、テレビゲーム、キャラクターなどあらかじめいくつかの例をあげておく。 話し合いの時間を十分に取し、お互いの共通点を見つけていくように促す。また、なかなか会話の弾まないペアには個別に助言をしていく。
<p>2 調子のよい言葉の組み合わせ</p> <ul style="list-style-type: none"> 集めた言葉を、調子よく読めるように組み合わせ、交通標語のようなものをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「注意一秒 怪我一生」など身近な例をあげてどんな組み合わせがよいのかしっかり理解させる。
<p>3 言葉を音符や休符で表す</p> <ul style="list-style-type: none"> できた言葉の組み合わせを音符や休符で表してリズム譜をつくる。今回使うのは、八分音符、四分音符、八分休符のみとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 次のような法則を、あらかじめ教えておく。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>[ター] など長い音 → </p> <p>[タ] など短い音 → </p> <p>[ッ] など詰まる音 → </p> <p>例えば「スケート」 → </p> <p>「ラケット」 → </p> </div>
<p>4 伴奏選びをする</p> <ul style="list-style-type: none"> 簡単なリズムとベースの入った伴奏パターンを選ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ポップスのリズムを活用して、楽しさを演出する。
<p>5 パソコンに入力して音程をつける</p> <ul style="list-style-type: none"> 音符をパソコンに入力して、音程をつける。 さらに、楽器を選んで、旋律をコピーして16小節の曲を完成する。 	<ul style="list-style-type: none"> パソコンの操作には簡易マニュアルを用意する。 机間指導をして個別にアドバイスを行う。
<p>6 発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> できた曲をクラスで発表し自己評価と相互評価をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 他のペアの良さに注目させる。 自分たちとの違いを楽しませる。
<p>7 自作自演</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの曲をリコーダーで演奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちのつくったメロディを自分たちで演奏させることでより理解を深めさせる。

クラスの生活班ごとに「エーデルワイス」の劇と合奏に取り組んだ。「サウンド・オブ・ミュージック」で、この曲の歌われる場面を説明し、せりふカードにより表現した。合奏は、リコーダーを中心に打楽器なども加えた。

1 題材設定の理由と研究との関連

エーデルワイスは、旋律の美しさから歌唱表現で取り扱われる傾向がある。ここでは、アルトリコーダーに親しみながら、グループ学習で打楽器なども加え、3拍子のリズム読譜も学習することにした。またこの曲が、ミュージカルのどの場面で演奏されているかを知り、その情景を劇で表現し、多様な表現活動を通して生徒の心の内面を引き出すことも大切と考えた。そこで合奏や劇による「ミニ・ミュージカル」の取り組みをグループで行い、創造性や個性を多面的に発揮させ、互いに助け合い認め合う気持ちを育て、共に音楽をつくり上げる喜びを体験することをねらいとして本題材を設定した。

2 仮説検証の視点

	コミュニケーション	自己表現	領域の関連	読譜指導
指導目標	グループ活動を通して交流を深め、助け合う気持ちを育て、鑑賞し合うことで、良さを認める態度を育てる。	多様な表現活動を通して、自分の役割を認識させ、自分なりの表現をさせる。	合奏や劇を通して、音楽、文学、演劇の要素を体験させ、作品の理解を深める。	三拍子のリズムカードを見ながら手拍子でリズムを打ち、音符や休符に慣れさせる。
評価の観点	交流が深まり助け合う気持ちが育ったか。 鑑賞し合うことで、互いの良さを認める態度が育ったか。	自分の役割を認識し、友達と協力して活動でき、自分なりの表現ができたか。	多様な表現活動ができ、作品に対する理解が深まったか。	リズムカードを見て、三拍子のリズムを打つことができ、音符や休符に慣れたか。
指導上の工夫	授業の最初に、クラス全体やグループごとに、リレーションを行い、心をほぐし、互いに協力し合える雰囲気をつくる。	合奏；自分の興味や能力に応じて、楽器を選択する。 劇；小道具やせりふをグループで工夫する。	ミュージカルの鑑賞や多様な表現活動をすることにより、生徒の幅広い興味や関心を引き出す。	リズムカードを用い、楽譜に視覚で慣れる。グループ内でリズムリレーを行い、拍子感覚を養う。

3 生徒の反応と考察

(1) コミュニケーションの視点

「やっぱりみんなで合奏するのは楽しい。」「いつも生活している人たちといろいろ練習して楽しかった。」「自分たちのペースで練習できたのでやりがいがあった。」など、個人ではなく、集団での取り組みに満足した生徒が多かった。また、「あの班の合奏はよくまとまっていた。」「あの人の演技は上手だった。」など、他を認める感想も多数あった。今回のグループ学習では、リレーションづくりのために集団ゲームを取り入れ、互いに協力し合える雰囲気をつくった上での取り組みだったため、生徒同士の活動が深まったように感じた。

(2) 自己表現の視点

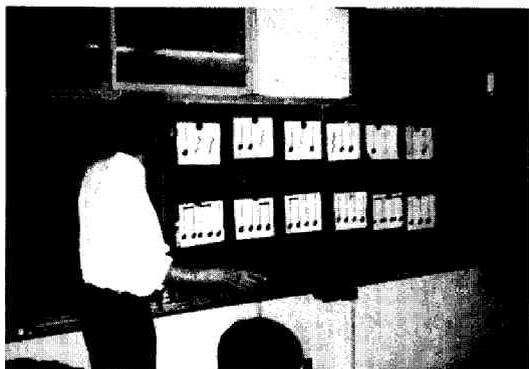
合奏では、「自分ができる楽器を選べたからやる気になった。」「自分のパートがうまくできたのでよかった。」「打楽器は単純でやる気がしなかったけど、いろいろ工夫したらだんだん面白くなった。」など、意欲をもち自分の役割を果たせたことへの満足感があったようだ。劇では、「演技をするのは恥ずかしかったけど、表現の方法をみんなで考えるのは面白かった。」「同じ役でも違うやり方があるものだと思った。」など、演技をすることに恥ずかしさを感じる反面、表現活動への興味を示す生徒も多かった。また、少しでも素直な自己表現をさせるためには、自分が周りに受け入れられている意識がもてるよう、日頃の人間関係の育成も大きなポイントであると実感した。

(3) 領域の関連の視点

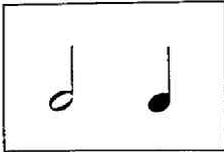
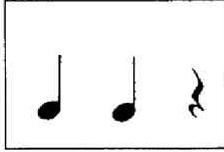
多様な表現活動を行うことで、どの生徒もいずれかの場面で活躍する機会があったように思う。「授業でいろいろなことができたので飽きなかった。」という感想もあったが、生徒に幅広い体験をさせて活躍できる機会を増やすことによって、作品がより身近な存在になり、作品に対する理解が深まったように感じた。

(4) 読譜能力の視点

今回は三拍子のリズム打ちに重点をおいた。基本的な音符や休符の組み合わせのため、ほとんどの生徒がカードを見ながら抵抗なく取り組めた。理論だけの指導ではなく、リズムカードを使用するなど、生徒の興味を引き出し継続的に指導することが大切であると感じた。今回は音符や休符の長さの割合の理解にとどまったが、今後は音程の指導にも広げていきたい。



4 学習の実際

	学 習 内 容	生徒の反応と評価
リ レ ー シ ョ ン づ く り	<ul style="list-style-type: none"> • 曲に合わせて肩たたき • スキンシップ • ことづてリレー • パントマイムクイズ • 運ぶ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>*クラス全体やグループごとに楽しみながらゲームなどの活動に参加し、互いに打ち解け、協力できる雰囲気になるよう心がける。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> • 楽しみながら活動する生徒が多く、生徒同士のきずなが深まった。 • 表現活動の動機付けになった。 • パントマイムなどの表現が苦手な生徒もリレーションが進むにつれ、グループの雰囲気が和み、次第に表現できるようになっていった。 (相手のことをわかろうとする気持ちをもたせる指導が必要である)
リ ズ ム 練 習	<ul style="list-style-type: none"> • リズムカードを用い、三拍子のリズムパターンを手拍子で打つ。 • リズムパターンを組み合わせ、リズム打ちを行う。 • グループ内で、自分で考えたリズムパターンをリレー形式で打つ。 <p><リズムカード></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">  </div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> • リズムの組み合わせを替えると興味をもち、面白がって練習した。 • リレー形式によるリズム打ちは、拍子を取りながら行くとやりやすいようだ。 • リズムカードを見ながら行うため、三拍子の感覚に早く慣れるとともに、音符や休符の理解が深まった。
曲 の 練 習	<ul style="list-style-type: none"> • 「エーデルワイス」の2つの旋律をアルトリコーダーで練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> • アルトリコーダーにあまり慣れていないため、主旋律はソプラノ、アルトのどちらのリコーダーでもよいことにした。 • 副旋律は動きが少ないため、ほとんど生徒がアルトリコーダーで吹けた。

グループ	<p>[合奏]</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ内でパートを分け練習する。 ①主旋律のパート（アルト・ソプラノ） ②副旋律のパート（アルト） ③打楽器（トライアングルなど） ④ピアノ伴奏（希望者のみ） 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちで楽器を選択させたので、積極的に練習する生徒が多かった。 グループ内で互いに教え合い、助け合っていた。
	<p>[劇]</p> <ul style="list-style-type: none"> 「サウンド・オブ・ミュージック」の中で、この曲が出てくる場面の状況をせりふカードを配付して説明する。 マリア、大佐、子ども役を分担して行い、せりふの読み合わせを行う。 振り付けなどの相談をして、練習を行う。 小物類を工夫して作製する。 	<ul style="list-style-type: none"> せりふは、生徒たちがアレンジした。 最初は、表情が乏しい読み方であったが、だんだん表情豊かになった。 振り付けなどの表現は、実際に演技すると難しそうであった。 付けひげ、リボン、めがね、かつらなどをよく工夫して作っていた。
発表	<ul style="list-style-type: none"> 劇と合奏の発表（ミニ・ミュージカル） 鑑賞している生徒は、発表しているグループのよい点を見つけ、学習カードに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 劇は、初めての試みのため、十分に表現できない部分もあった。 合奏は、バランスもよく、打楽器も効果的でよい演奏であった。

ミニ・ミュージカルにチャレンジ!

～エーデルワイス～

我がグループのテーマ

組 員

組 員

組 員

組 員

楽器の工夫

上のパート

下のパート

打楽器

その他

キャスト		演技				演技		演技	
名前	演技した曲(パート)	演技							
マリア									
大 佐									
子供1									
子供2									
子供3									
子供4									

*子供1～4は、服装がらでも良い。
 *大佐の服装は、子供用(1歳児)・子供用(2歳児)・子供用(3歳児)のものを着せても良い。
 *大佐の服装は、子供用(4歳児)のものを着せても良い。
 *大佐の服装は、子供用(5歳児)のものを着せても良い。

演技……自分から勝手に演技ができた。
 演技……演技しなかった。

「エーデルワイス」
～ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」より～

いたずら好きでひねくれ者のトラップ家の子供達が、家庭教師のマリア先生のおかげで心の優しい子供達に大変身！そんな中、大佐（お父さん）が新しいお母さんを迎える時に、子供達が歌謡の歌を歌い、お母さんはそのきれいな心のこもった歌に大感動！それまでは同じさー辺りだった大佐も子供達の歌を聞き、少しずつ昔の懐かしさが戻ってきた。すっかり和やかなったトラップ家では、子供達が歌ったり、大感動をして楽しんだ。そこで、次は大佐にも何か歌ってもらいたくなった……。

マリア：さあ、次はだれに歌ってもらいましょうか。

子供1：おえ、先生。

子供達みんな、先生を囲み劇演

子供2：ステキ！

子供3：それがいいわ

子供達の話を聞いたマリアは

マリア：本当？ ぜったい？！

子供達、みんなうなづく

マリアは大佐のもとへ、子供達もマリアの歌に続く

マリア：全員の前です。

あなたです。マリア 大佐にギターをさしだす

大佐：あー、そりゃ困る。

マリア：どうぞ。再度、ギターをさしだす

大佐のほける様子を見て、みんな笑う

大佐：とても声が出ないよ。

マリア：みんなから聞いています。お上手だって……。

大佐：いや！ だめだ！ 何年もまったく歌っていないから。

子供4：ほ、覚えてるわ。

子供1：うん、僕も覚えてるよ。

子供2：歌って！

子供3：お願い！

子供4：お父様、お願い！

子供達 真剣に頼みこむ

大佐 しおしおわかったという顔をする

1 年 組 第 〇 〇 氏 名

「さくらさくら」を合唱やリコーダーで合奏し、陰音階の感じをつかむ。そして、グループで相談しながら、日本を紹介するコマーシャルをつくる。その中には、自分たちの身近に思える「日本らしい音」を取り入れる。

1 題材設定の理由と研究との関連

アンケート調査からも読み取れるように生徒の関心の薄い日本の音楽を、身近に感じられるようにしたい。そのため、小学校第4学年でも学習している「さくらさくら」を、合唱やリコーダー合奏、箏で演奏し、日本の音楽に親しめるようにした。

そして、学習を発展させるために、日常ふれる機会の多いコマーシャルを自分たちでつくることで、さらに日本的な音を身近なものにしていきたい。また、グループ活動を通して、互いに助け合い認め合う気持ちをはぐくむことができるよう、この題材を設定した。

2 仮説検証の視点

	コミュニケーション	自己表現	領域の関連	読譜指導
指導目標	グループ活動の中の助け合いや、作品を鑑賞することで、互いの良さを認め合う気持ちを育てる。	日本の音や音楽のイメージを自分なりに考え、グループで表現する。	合唱や合奏などと鑑賞や創作の活動を組み合わせ、日本の音楽への理解を深める。	合唱やリコーダー演奏のための階名唱ができる。 日本の音階を理解する。
評価の観点	助け合い、鑑賞し合うことができたか。 互いの良さを認め合うことができたか。	自分たちの考える日本の音や音楽のイメージを表現することができたか。	合唱や合奏などと、鑑賞や創作の活動を組み合わせ、日本の音楽への理解を深めることができたか。	合唱やリコーダー演奏のための階名唱ができたか。 日本の音階を理解できたか。
指導上の工夫	簡単なゲームなどでリレーションを行い、協力し合える雰囲気をつくる。	イメージを豊かにするために、コマーシャルなどのビデオを利用する。	多様な表現ができるように、箏なども含めた日本の音を実感できるようにする。	階名唱を繰り返し行うことで、演奏を容易にする。 「さくらさくら」の旋律から陰音階の音をさがす。

3 学習計画

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
①時	<ul style="list-style-type: none"> ・「さくらさくら」をリコーダーで二部合奏する。 ・使われている音を取り出し、陰音階をリコーダーで吹いて、感じをつかむ。 ・混声二部合唱をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・抑揚をつけて、フレーズがまとまるようにする。 ・五線上に陰音階を示し、わかりやすくする。 ・日本的な響きに気付くことができるようにする。
②時	<ul style="list-style-type: none"> ・箏を演奏する。 ・次時に行うコマーシャルづくりについて知らせておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な奏法の説明を行い、簡単に演奏できる曲を用意する。
③④時	<p>《コマーシャルをつくろう》 —日本の街へいらっしゃい—</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで相談して、日本の街を選ぶ。 ・テーマに合わせて内容を相談する。 ・台本をつくる。 「日本的な音」の演奏を入れて構成する。 ・グループで創作や練習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・コマーシャルなどのビデオを視聴する。 ・コマーシャルの事例を示す。 ◇外国の人が訪れたいくなるようにつくる。 ◇日本的な音を使う。 ・台本用のプリントを用意する。 せりふや動作、ナレーション、音楽などの計画を書き込むことができるようにする。
⑤時 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに発表する。 ・よいところを互いに認め合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表するための舞台を準備する。

4 予想される生徒の活動と反応

- (1) 箏や三味線、シンセサイザーなどで日本らしい音を表現することにより、日本の音や音楽に興味・関心を示す。
- (2) 日本の音階を使って日本らしい音を表現することにより、日本の音階を理解する。
- (3) せりふや動作で日本らしさを表現することにより、日本に対する理解を深める。
- (4) コマーシャルソングをつくることにより、日本の音に興味・関心を示す。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

研究を進めるに当たってアンケート調査を行い、生徒の実態を把握して考察を行った。

そこで、「自ら学ぶ意欲を高め、共に楽しむ音楽活動」の指導の方法として、次の4つの視点から検証授業を行った。

- (1) 音楽活動を通して、互いに認め合い助け合う気持ちを育てる。(コミュニケーション)
- (2) 生徒が自分から工夫し、自由に表現しようとする意欲と活動を支援する。(自己表現)
- (3) 領域相互の関連性を大切にしながら、生徒それぞれの良さを生かす。(領域の関連)
- (4) リズム学習を中心に、無理なく行える読譜指導の工夫をする。(基礎・基本)

各実践から得られた研究の成果は、次の通りである。

- ① グループでの人間関係づくりを深めることによって、生徒の音楽への興味・関心がより高まってきた。
- ② 製作途中や活動過程で、多くのコミュニケーションが存在し、人間関係が深まり、互いに協力してつくりあげる態度が育ってきた。
- ③ 自分のつくった曲を演奏することは、表現への意欲が高まり、楽しんでいる様子が見られた。
- ④ 自分たちが考えた言葉の組み合わせを音符や休符で表し、音程付けをする場面でパソコンを活用したことは、創作活動を容易にすることができた。
- ⑤ 歌唱、器楽、鑑賞、創作の各領域を関連させた取り組みの中から、生徒は、普段不足しがちな助け合いや協力、豊かな感動体験等、多くのことを学び取っていた。
- ⑥ リズムカードを活用したリズム読譜は、楽しみながら体得することができた。

2 今後の課題

本研究を通して、多くの成果を得ることができたが、研究が深まるにつれ、課題も見えてきた。次のような課題を今後も研究していく必要があると考えている。

- (1) 自主的・意欲的な取り組みには、じっくり取り組める時間が必要であるが、限られた時間の中で学習活動をどのように工夫し、生徒の自主性を育成していくかということ。
- (2) 1単位時間の中で、達成できる題材や学習計画を工夫すること。
- (3) 音楽科と他教科との関連を図った、横断的・総合的な学習を工夫すること。
- (4) 読譜力の向上は、3年間を通して、継続的に行うこと。
- (5) 本研究では、リズム読譜に重点を置いたが、さらに旋律の視唱や視奏の研究を行っていくこと。
- (6) 音楽の学習は、技能の向上や表現の工夫にとどまらず、人間関係を深め、高め合うことにより、音楽を通して豊かな人間性を養うこと。